

# 回想十年

——退任の辞にかえて——

禅研究所所長 中 租 一 誠

私こと、当年三月末日をもちまして、後半生の教育・研究の場でありました本学を退職いたし、そして十年間の長期に及びました禅研究所所長の任を辞すことになりました。ひとしお、感慨無量なる思いをいたしている次第であります。

顧みますと、私が本学に一教員として赴任したのは、大学紛争のさなか、緊張感の漂う昭和四十四年の春でした。本学短期大学部専任講師として、黒板を背にする教員の生活が始まりました。そして翌年、文学部宗教学科開設に伴い、移籍して今日に至るまで、文学部教員として教育・研究に携わってまいりました。その間、教育環境の推移のなかで、本学は刮目に価する躍進を遂げてきました。相継ぐ学部・学科増設をはじめとして、日進学舎の開設、学院創立百周年記念行事、学院百二十周年・大学開学五十年記念行事等の盛事を重ねて、名実ともに中部地区に屹立する総合大学としての偉容を確立して今日を迎えるに至り、その栄

光を共有することができたことは欣快の極みであります。

平成七年四月、竹内道雄第三代禅研究所所長の後を承けて、その重責を担うことになりましたことは、念慮のほかとはいえ光栄に存ずる次第でありました。爾来、実に十年の長期に亘りこの席を汚してまいりました。「十年一日の如し」という諺言もあります。また、「十年一剣を磨く」という先人の佳言もあります。浅学非才の身が、大過なく今日を迎えることができましたのも、偏に小出忠孝学長先生をはじめとして、本学教職員各位の暖かいご支援によるものであります。就中、当研究所の運営に惜しみない尽力を注がれてきた研究所員、歴代幹事・研究員・職員各位、さらには参禅会運営委員の皆様のご加担に負うところ尽大であります。ここに衷心よりお礼のまことを捧げるものであります。

この十年間の当研究所の歩みを回顧するとき、記憶に残ることは多々あります。とりわけ、平成十二年十一月、本学坐禅堂において執り行われました禅研究所開所三十五周年・坐禅堂開単二十周年の記念式典と、これに因んで開催されました国際日本文化研究所長（現文化庁長官）河合隼雄先生の「開かれたアイデンティティー——仏教の役割を求めて——」の講演会は鮮明な印象として脳裡に残っております。当時のわが国の学生層が直面する意識に視座を置いた意義深い講演であったことを記憶しています。

多岐に亘る当研究所の活動のなかで、月例として実施してまいりました「火曜参禅会」も私にとりまして思い出深いものとなりました。そして、毎年恒例として計画いたしました所員の調査旅行と参禅会主催の研修旅行も懐かしく想い出されてきます。就中、昨年夏期休暇中に行ないましたイタリア研修は、禅研究所で

は初めてのヨーロッパ研修となり印象深いものとなりました。ミラノに開設されている曹洞宗ヨーロッパ開教総監部訪問やミラノ郊外の普伝寺僧堂の拝登、アッシジの聖フランチェスコ修道院の研修など一宗教の枠を越えた諸宗教の相互理解の重要性を認識する好機となりました。とりわけ、ヴァチカンでのローマ法王の謁見に参列できましたことは感銘深い体験となりました。カトリック教圏の高揚した宗教性に触れることができましたことが印象に残ります。これが、将来における禅の国際化の一助となればとひそかに念じています。

本学における禅研究所の役割は、わが国の曹洞禅の創唱者である道元禅師の禅風に基づく「行学一体・報恩感謝」の建学の理念の参究と学内外への宣揚にあります。二十一世紀を担う若人の殿堂である愛知学院大に開設された当研究所と坐禅堂が、ひろく学生諸士や学内外の篤学の求道の士に、「禅」を通して大いなる指針を提供することができたならば、その意義は量り知れないものがあります。今後、時代の変化に即応しつつ、禅の伝統が発揮されることを念願して止みません。

不肖、私のあとを承けて、第五代所長として、文学部教授大野栄人先生が所長にご就任されることになったことは、洵に慶賀措く能わざるところであります。学殖・識見兼備の稀有なる逸材を研究所の総帥に迎えて、本学の建学の精神の宣揚と健全なる知識人の育成に、さらに邁進されることを心から期待を寄せつつ、退任の蕪辞といたします。

平成十七年三月 下流